



Title	乳腺線維腺腫の発生と発育過程に関する研究：立体再構築及び臨床病理学的検討
Author(s)	向坂, 隆
Citation	大阪大学, 1974, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31267
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	向坂隆
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 3218 号
学位授与の日付	昭和 49 年 11 月 1 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	乳腺線維腺腫の発生と発育過程に関する研究 —立体再構築及び臨床病理学的検討—
論文審査委員	(主査) 教授 曲直部 壽夫 (副査) 教授 宮地 徹 教授 倉智 敬一

論文内容の要旨

〔目的〕

乳腺線維腺腫は日常しばしば遭遇する疾患であるにも拘らず、悪性化の傾向がほとんどない良性腫瘍であるため、臨床的に乳癌との鑑別診断という点で若干の関心が払われている以外現在ではほとんど研究されておらず、とくにその発生および発育過程については未解決の点が多い。そこで大阪大学第 2 外科における線維腺腫症例について検討を加え、その発生と発育過程を解明しようとした。

〔方法ならびに成績〕

昭和 34 年から昭和 48 年までの 15 年間に組織学的に診断しえた乳腺線維腺腫は 426 例で、これを対象として下記の 2 つの観点から検討を加えた。

(1) 線維腺腫の発生と発育に関する年令的観察

間質成分を成熟度の程度により、また上皮成分を増殖の強さに応じてそれぞれを 3 つの grade に分類し、線維腺腫の間質の成熟度と上皮の増殖度をしらべたが、約 1/3 の症例では同じ腫瘍内に発育 grade の異なる病変が混在していた。そこで線維腺腫内の (i) predominant の病変、(ii) 最も成熟度の低い病変、(iii) 最も成熟度の高い病変、の各々について別々に検討し、この腫瘍の発生時期と成長の過程を知ろうとした。

まず predominant の病変について間質成分と上皮成分との相関性をしらべた結果、間質が幼若な症例では上皮の増殖度がつよく、間質が成熟した症例では上皮の増殖度の弱いものが多かった。

つぎに年令との関係をしらべるために、20 才以下の若年群 67 例、40 才以上の高年群 40 例および 27～29 才の中間年令群 40 例を選出した。

まず predominant の病変について検討した結果、若年群では幼若な間質と増殖度の強い上皮をもった症例が多く、中間年令群と高年令群ではともに成熟した間質と増殖度の弱い上皮をもった症例が多かった。

つぎに腫瘍内の最も成熟度の低い間質から検討すると、中間年令群では高年令群にくらべ腫瘍内の一部に、より幼若な間質をもった症例の多いことが判った。

逆に腫瘍内の最も成熟度の高い間質から各年令群を比較してみると、若年群では発生後間もない線維腺腫がかなり高率にみとめられるのに対し、他の2群では発生後経過の長いと考えられる成熟期の腫瘍が大多数を占めていた。

(2)連続切片と立体再構築よりみた線維腺腫の発生と発育の様式

研究対象の426例についてまず間質成分の成熟度と上皮成分の増殖度から各症例ごとに検討したのち、年令、腫瘤の大きさ、組織型なども考慮に入れてこのうちから40症例を選出し、連続切片を作製してH.E.染色のほかワンギーソン染色、マッソン染色、トルイジンプルー染色などを行った。さらにそのうちの典型的な症例の立体再構築模型を作って線維腺腫の発生と発育の様式を検討した。

その結果、線維腺腫は限局した範囲内の多数の小葉から発生した病変（単位病変）の集合体として成り立っている場合が多いことがわかった。発生初期の症例では、腫瘤内に線維腺腫化した小葉や一部だけが線維腺腫化した小葉や正常小葉が共存し腫瘍の境界はまだ明瞭でない。発育段階が進むに従って、単位病変の各々が発育増大し、さらに近接の小葉から新しい単位病変が発生することもある。これらが独自に発育しながら互に接近、集合し、周囲の乳腺組織を圧迫して被膜を形成して境界明瞭な腫瘤を形づくる。腫瘤内にも腫瘍性増殖を示さない組織があり、これらは小葉性病変の増大とともに圧迫されて次第に帯状から索状となり、単位病変間の中隔と化する。

[総括]

- (1) 線維腺腫は限局した範囲内の多数の小葉から多中心性に発生した単位病変の集合体として形成されていることが多い。
- (2) この単位病変の発生は多少の時間的なズレをもって、つまり異時性にもおこり、それぞれが独自に発育過程を進むため1つの線維腺腫内に幼若期、増殖期、成熟期、萎縮硬化期など種々の病期の病変が混在することもある。
- (3) 線維腺腫内で腫瘍性増殖を示さない小葉間の組織は小葉性単位病変の増大とともに圧迫されて帯状ないしは索状の中隔を形成する。
- (4) 単位病変間の中隔が形成されない場合は単位病変が互に癒合するが、この際各々の所属乳管の間には交通がおこらない。
- (5) 線維腺腫においては幼若な間質をもつ症例では上皮の増殖度の高いものが多く、一方硝子化して細胞成分に乏しい間質をもつ症例では上皮の萎縮がしばしばみられる。
- (6) 若年期には発生初期の幼若な線維腺腫がかなり高率にみられるが、このような症例は年令が高くなるとともに減少し、高年の患者では発生後経過の長い成熟期の線維腺腫が多い。つまり線維腺腫は罹患年令の高い症例でも若年期に発生したものが多い。

論文の審査結果の要旨

乳腺線維腺腫の発生と発育過程や立体構造については従来ほとんど解明されていなかったが、本研究では426例という多数の手術症例について、組織像、組織学的成熟度を詳細に検討、分類した後、年齢、腫瘍の大きさ等の臨床事項も加味して40症例を選択し、これらの連続切片標本に各種結合組織染色を施し、さらに連続顕微鏡写真から正確に組立てた立体再構築模型を検討することにより、線維腺腫の立体構造と発生および発育過程を明らかにすることができた。

結 論

- (1) 線維腺腫の多くは複数の小葉から多中心性に発生した単位病変の集合体として形成される。
- (2) 単位病変は異時性にも発生する。
- (3) 単位病変は互に癒合し、あるいは中隔を形成しながら発育増大する。
- (4) 幼若な間質をもつ症例では、上皮の増殖度の強いものが多い。
- (5) 線維腺腫の多くは若年期に発生する。